



書林探索

# 本当に必要か、何を担うべきか 新しい経済学で問う「中央銀行」

**本**

書は中央銀行制度をめぐ  
る問題について、新制度  
経済学、組織の経済学、

比較制度分析などの経済理論に基  
づいて検討を加えたものである。

中央銀行について書かれた著作、  
金融政策について書かれた著作は  
たくさんあるが、中央銀行制度に  
ついて、新制度経済学の立場から  
分析した研究は評者が知る限り本  
書が唯一のものであり、極めて重  
要な貢献である。

著者は長らく日本銀行に勤務し、  
中央銀行の機能と制度を内部から  
支えてきた。その経験に基づく問

題意識は極めて明確であり、読者  
には、中央銀行員が何を考えて、  
その制度を運営しているのか、あ  
るいは何に悩んでいるのかが本書  
を読むと伝わってくるだろう。

具体的な問題意識を紹介してお  
こう。まず、中央銀行は本当に必  
要なのだろうか。また、どのよう  
な機能が必要とされており、どの  
ような機能は民間代替が可能だろ  
うか、という問題がある。次いで、  
中央銀行のガバナンス構造はどう  
あるべきか、複数ボード制（政策  
委員会、経営委員会、監督委員会  
等）か単一ボード制かという問題

選・評

北村行伸

一橋大学経済研究所教授

についても熟識すべきであるにも  
関わらず、新日銀法で単一ボー  
ド制が採用されて以来、ほとんど  
議論されていない。現金通貨供給  
機能は中央銀行が担うべきなのか  
政府と分担すべきなのか、また民  
間機関で代替できないのかという  
問題もある。さらに、中央銀行が  
担う決済システムについても、シ  
ステムの所有権やガバナンス機構  
のあり方など重要な検討課題であ  
ることが示されている。

これらの組織や制度の問題を新  
制度経済学で論じることの意義は、  
本書から十分に伝わってくるが、  
残された問題も明らかだ。すなわ  
ち、中央銀行制度は、決して静学  
的なものではなく、進化するもの  
である。既存の制度に経済合理性  
があるということでは止まるのでは  
なく、複数制度間の均衡理論や制  
度の進化論のような新たな理論が  
必要だろう。また、それは学習し  
続ける組織としての中央銀行像と  
も密接に関連しており、中央銀行  
の組織のあり方にも関わる課題で  
あることを指摘しておきたい。

新刊フラッシュ

国債リスク

森田長太郎 著

東洋経済新報社 1600円

住宅ローン金利や為替レートにも大き  
な影響を及ぼす国債市場。著者は日本  
国債の六つの将来シナリオを予測。国  
債がこれまでと違う新たな局面を迎え  
たわけを解説する。

「主婦の気分」マーケティング

大給近憲 著

商業界 1500円

「気分で買いたい物をする」所帯じみたよ  
うに見られたくない」といった、普通  
の主婦の消費行動を事例と共に徹底  
分析。主婦の心理を理解した商品づく  
り、売り場づくりを考える。

資産価値を守る！  
大災害に強い町、弱い町

山崎隆著

朝日新書 760円

資産価値の高い不動産を選ぶには？  
多くの要因が絡む不動産の資産価値を  
自然災害リスクと賃料相場で分析。主  
要都市の住宅選びを解説する。

バンカーズストーリー

中島久 著

近代セールズ社 1000円

理屈通りにはいかない金融の最前線。  
金融機関で働くとはどういうことか、  
仕事のやりがいとは何か。融資の現場  
から、内部でのキャリア形成まで、地  
域金融機関の世界をリアルに描写する。

\*本の価格はすべて本体価格です。